

ビジネス通訳の現場における 生成 AI 機器の利用に関する調査報告

The report on the use of generative AI tools in the area of business interpreting

高橋 絹子
Kinuko Takahashi

The present paper reports the findings of a survey investigating the use of AI tools in the area of business interpreting. According to the information provided by a professional interpreter engaged in the business, there are currently cases where English and Japanese transcriptions, along with their translations, are displayed simultaneously on the PC screens. In such cases, the interpreters can interpret spoken texts by referring the transcription and translation. Accordingly a survey was designed to explore the extent to which this type of practice is currently prevalent in Japanese business along with the interpreters' orientations towards such a practice in these contexts.

Additionally, the study explores the prospects of interpreters collaborating with AI tools in the future by analyzing the interpreters' thoughts on this issue. Although the respondents expressed skepticism about the complete replacement of human interpreters with AI tools, by highlighting such distinct abilities of interpreters as comprehending non-verbal communication for which human involvement is essential, they anticipated a future in which human interpreters collaborate with AI tools. Since this marks only the initial stage of AI development, it is imperative to monitor the evolving circumstances.

キーワード：

通訳、AI、共存、ニュアンス、非言語情報

1. 導入

本稿は2023年5月にビジネスの分野で稼働する通訳者に対して実施したアンケートに対して改良を行い、ビジネスの分野で稼働する通訳者の生成 AI 機器の利用に関して再びアンケート調査を行った結果を報告するものである。2021年2月以降、経年でビジネスの分野で稼働する

通訳者を対象にインタビューを実施してきた(高橋 2022, 2023a, 2023b)。これはビジネス関連の通訳現場でどのような変化が生じているのかを理解することを目的として実施してきたものである。もっとも最近の調査は、2023年2月に実施した調査であるが、その際にはインタビューに応じた通訳者からは、AIを利用した機器に関して言及されることはなかった。このことはインタビューでAIに関連する質問が行われなかったため、特に言及がなかったのか、あるいは通訳現場において利用する経験があまりなかったため、言及がなかったのか、そのいずれであるのかは不明であった。

その後、調査に加わっていない知人の通訳者(以下、通訳者A)から、通訳現場において、AIを利用した機器を頻繁に利用しているため、その状況を報告したいといった研究協力の申し出があった。その内容は、今までのインタビューでは報告されていない新情報であった。そのため、2023年2月に実施したインタビューの参加者が稼働する通訳現場の状況も確認すべく、急遽、追跡調査をアンケート形式で実施した。結果は2023年9月2-3日に開催された日本通訳翻訳学会第23回年次大会の研究発表で報告された(高橋 2023c)。

発表の際、9名のアンケートの協力者は通訳現場で具体的にどのようにAIを利用した機器を利用しているのかという質問が参加者からあった。アンケート調査では、その点まで詳細に尋ねることはなかったため、具体的な利用方法は不明であった。従って、通訳者Aのインタビューと9名の通訳者へのアンケート調査の2つの調査を本調査の予備調査と位置付け、通訳者Aのインタビューデータに基づき、アンケートの質問項目を加筆修正し、アンケートの協力者の数を増やして再び調査を行った。

通訳者の繁忙期は、一般的に春と秋とされている。2023年秋の通訳者に対する需要は、「最大級の忙しさ」「過去最大の忙しさ」(高橋 2023b)と報告があった。またインタビュー実施時の2023年春においても「通訳の売り上げ記録を更新中」(高橋 2023b)との報告もある。先に行ったアンケート調査では、9名の回答者のうち、実際にAIを利用した通訳現場を経験したという回答者は9名中3名に過ぎず、しかも「経験したことがある程度」との回答であったが、その後、約8か月経過した現在では、状況はどのように変化しているのだろうか。ビジネス関連の通訳場面では、AIを利用した機器はどの程度、利用されるようになってきているのだろうか。また現場の通訳者は現状をどのように感じているのだろうか。

もしAIを利用した機器が通訳現場で頻繁に利用されている場合には、今後の通訳者の育成に関しても何らかの変更を求められるようになる可能性も否定できない。またそれより以前の議論として、通訳者を育成する必要があるのかという議論が発生する可能性もある。

2023年5月の調査では、9人全員が「AIがヒトの通訳にとって代わることはない」と予測をしていたが、もしまた同じような結果が出た場合には、さらに今後の育成で「ヒトでなければできない通訳」のできる通訳者の養成を視野に入れる必要があるであろう。

いずれの判断を下すにしても、現場の状況や実際に最前線の現場で現在、稼働している通訳

者の報告を分析する必要があると考える。技術の発展には目覚ましいものがあるため、通訳者の通訳スタイルも刻々と変遷を遂げてゆくことが予想される。それぞれの段階を時系列的に記録し、その変遷をたどることを可能とする必要性も感じられ、そのことが本稿を速報として報告する理由の1つでもある。

本稿は、第1章の導入の後、第2章では先行研究と背景を紹介する。第3章では本調査の課題と目的の確認を行い、第4章では調査に関して述べ、第5章では結果を報告する。第6章では、結果を考察し、第7章では結論を述べ、第8章では今後の課題に本研究の限界を含めて報告する。

尚、本研究で扱っているのは、「話された言葉」を訳出する通訳者のみに関する研究で、「書かれた言葉」を扱う翻訳者は対象とはしておらず、調査の範囲には含まれていない。

2. 先行研究と背景

先行研究としては、コロナ禍が始まって以来、1年ごとに毎年、通訳現場の実態を調査するインタビュー調査が存在している。コロナ禍が始まった翌年の2021年2月には11名の主にビジネス分野で稼働する通訳者を対象に通訳現場の実態を調査する目的で、インタビューが実施された（高橋 2022）。それによると通訳はほぼ100%、オンラインによる遠隔通訳で実施されていた。その1年後の2022年の春も同様にほぼ100%近い通訳案件がオンラインで行われていると報告されている（高橋 2023a）。これらの先行研究においては、まだ通訳現場でAIを利用した機器が利用されているという報告はない。

高橋（2023a）では、インタビューの参加者の中には、会議の参加者がパソコンのカメラをオフにすることにより、話者の顔が見えないことを遠隔通訳のデメリットとして報告する参加者がいる一方、音声だけでも問題ないとする参加者も存在し、「通訳者には『耳に頼るタイプ』と『目に頼るタイプ』がある」ことが報告されている。

その翌年の2023年春に再び、通訳現場の変化を調査するために、同じ通訳者を対象にインタビューを実施した。2022年の秋ごろから通訳者に対して空前の需要が発生し、過去最大の案件数との報告があった。しかしこの調査においても特にAIを利用した通訳に関する報告は行われなかった。

2023年の春先から、ChatGPTという対話型人工知能（AI）が頻繁に話題に上るようになり、文部科学省も利用の指針を策定する方針を固めるなど（朝日新聞デジタル 2023年4月6日）教育現場でもAIを利用した機器の利用が取り上げられるようになった。

それを受け、2023年5月には追跡調査として、2023年2月にインタビューに応じた9名の主にビジネス分野で稼働する通訳者にアンケートへの協力を依頼し、通訳現場におけるAIを利用した機器の利用の経験の有無を尋ねている。AIを利用した機器を利用したことがあるという

回答者は9名中3名で、しかも回答者全員の通訳経験の平均が20年を越えていたことから、「経験豊かな通訳者の稼働する場面では、あまりAIを利用した機器は利用されていない可能性がある」と結論づけた(高橋 2023c)。高橋(2023c)では、AIにはできない通訳にはどのようなものがあるか、その具体例を尋ねているが、「コンテキスト・文脈・本意をくみ取ることができない」や「隠語・新語・造語」や「Pre-editなし(の)文」が報告されている。さらに「指示語の連続・途中で終わってしまった文の解釈・話者の発言の修正」なども報告されている。また木村・高橋(2023)では、通訳者に対するクライアントの期待が報告されているが、クライアントが望んでいるのは「内容の深い理解(ニュアンスも含めた)・非言語情報の伝達である」ということが判明した。これはヒトならではの通訳ではないかと結論づけている。

コロナ禍が始まった直後には、松下(2020)が遠隔通訳の導入とその方式について調査を実施しているが、その時点ではまだAIを利用した機器というよりも「遠隔通訳システム」に関する報告が行われている。

3. 本調査の課題と目的

前述のように2023年の春以降、教育現場においても生成AIの利用に関する話題が頻繁に取り上げられるようになってきた。通訳現場では、AIの利用の現状はどのようなになっているのであろうか。2020年に世界的なコロナ禍に見舞われることとなり、その結果、従来の対面の通訳がオンライン方式へと移行されることとなった(高橋 2022)。また一旦コロナ禍が収束している2023年の春以降も、対面の通訳が戻ってきているその一方で、依然として、オンラインを利用した通訳や、通訳現場は対面ではあっても、通訳スタイルはハイブリッド方式でオンライン通訳が行われるという。このように通訳者にとってはオンラインは避けられないとの報告がある(高橋 2023b)。

その場合、パソコンなどの機器を利用することとなり、例えば書き起こしアプリなど、通訳が行われている際にAIを利用したアプリケーションなどを利用しやすくなると予想される。では日本のビジネス分野の通訳現場では、どれくらいAIを利用した機器が用いられているのであろうか。用いられている場合には、どのような形式のものが利用されているのであろうか。その状況を通訳者自身はどのように捉えているのであろうか。さらに通訳者自身は、通訳現場以外でも通訳の仕事のために、何かAIを利用した機器を利用することがあるのであろうか。

通訳現場の現状を理解することは通訳者の育成に関してはもちろんのことであるが、通訳というものの本質を考察する上でも、必要不可欠なことである。本調査はこれらの目的で実施されるものである。

4. 調査

以上の研究課題の答えを得るために、以下のような手法で調査を行った。

4.1 調査方法

事前に実施した通訳者 A に対するインタビュー調査と 2023 年 5 月に実施したアンケート調査を予備調査とし、その結果を踏まえて、このアンケートの項目や内容を加筆修正して再び、アンケートを作成した。アンケートは前回の調査時と同様に Google Forms を利用して作成しオンラインで実施した。

4.2 予備調査の協力者とアンケートの回答者

予備調査のインタビューに協力を得たのは、通訳者 A で社内通訳者である。通訳歴は 16 年であった。予備調査のアンケートへの協力者は、9 名のフリーランスの通訳者である。全員が 2023 年 2 月のインタビュー調査の参加者である。

本調査のアンケートでは、31 名の回答者の協力を得ることができた。その内訳は 25 名がフリーランス通訳者、5 名が社内通訳者、1 名が教員であった。教員は社内通訳とは判断しづらいため、フリーランス通訳者に加えることとした。通訳歴は、9 名が 20 年以上、6 名が 15 年以上 20 年未満、9 名が 10 年以上 15 年未満、2 名が 5 年以上 10 年未満、4 名が 5 年未満であった。

1 名は「フリーランス通訳」を選択しているが、通訳経験を問う項目で、「通訳歴はないものの会社で海外営業を担当し社内外のビジネス上での通訳は経験している」と記述していた。他の回答者とは若干、条件が異なるため、データに加えないこととした。従って合計人数は 30 名である。

4.3 手続き

予備調査となった通訳者 A へのインタビューは 2023 年 5 月に Zoom により実施した。所要時間は 22 分であった。質問は「通訳者として稼働する社内においてどの程度、またどのように AI を利用した通訳が行われているか」であった。基本的には自由に報告してもらったため、AI の利用に留まらず、社内通訳者としての通訳のやり方にも話題が及んだが、本稿に係る部分のみを扱う。

本調査のアンケートへの協力依頼は、個人的に友人や知人の通訳者に依頼する以外に、2 つの組織を通じて依頼を行った。その 1 つは友人の経営する通訳エージェントである。登録する通訳者に対して、メーリングリストでアンケートへの協力を依頼した。もう 1 つは非営利の通訳者の登録団体である日本会議通訳者協会（JACI）である。友人である会員を通じて、フェイスブックの伝言板に広くアンケートへの協力を呼びかけてもらうように依頼した。実施した期

間は2023年10月30日から11月15日であった。

2023年5月にアンケートに回答した9名に関しては、同僚の通訳者にアンケートの転送を依頼するとともに、2023年5月の時点では、「AIを利用した機器を経験したことがない」と回答していても、それ以降に状況が変わっている場合には、再度、アンケートへの協力を依頼した。

予備調査の通訳者Aの報告では、画面に発話の書き起こしが映し出され、DeepLを用いた訳文も映し出されるということであった。それに基づき、以下の3のような質問を補足した。

1. 通訳の勤務形態（社内通訳、フリーランス通訳、その他）
2. 通訳歴（20年以上、15年以上20年未満、10年以上15年未満、5年以上10年未満、5年未満）。
3. 通訳現場で、以下のような経験がありますか？これ以外にも何かヒトの通訳以外の関与があった場合には「その他」にご記入ください（複数回答可）。
 - パソコンなどの画面に話者の日本語の発話を書き起こしたものが表示
 - パソコンなどの画面に話者の英語の発話を書き起こしたものが表示
 - パソコンなどの画面に話者の日本語を英語に訳したものが表示
 - パソコンなどの画面に話者の英語を日本語に訳したものが表示
 - どれも経験したことはない。
 - その他
4. 上記で経験したと答えたことは、どのくらいの頻度で経験がありましたか？
 - 経験したことはあるという程度。
 - 時々、経験している。
 - ほぼ常時、経験している。
 - その他
5. 上記のようなことがよく行われるようになった場合、どのように感じますか？（複数回答可）
 - 便利なので、好ましく思う。
 - 役に立つので、好ましく思う。
 - 信用できないので、好ましく思わない。
 - 通訳の仕事を取られるので、好ましく思わない。
 - なんとも思わない。
 - その他
6. 将来、ヒトの通訳者がAIと共存していくようになると思いますか？
 - そう思う。
 - そう思わない。
 - その他

7. 将来、ヒトの通訳者は AI にとって代わられると思いますか？
 - そう思う。
 - そう思わない。
 - その他
8. その理由を簡単にお願いします（自由記述）。
9. 通訳現場ではなく、ご自身で準備などの際に AI を利用したツールを利用している場合、何をどのように利用するのか、簡単にお願いします（自由記述）。

5 の質問に関して

AI を利用した機器を通訳現場で用いることを、通訳者が肯定的な気持ちで捉えているのか、否定的な気持ちで捉えているのかを探るためにこのような質問を設定した。また肯定的な捉え方に対しては、その理由となるような「便利なので」と「役に立つので」という文言を付記した。一方、否定的な捉え方に対しては「信用できないので」と「仕事を取られるので」という文言を付記した。肯定的でも否定的でもなく中立である「何とも思わない」という選択肢も加え、「その他」として、自由に記述できる欄も設けた。

尚、この質問は予備調査のアンケートには含まれていない。

5. 結果

以下、アンケートの項目に沿って、順番に結果を報告する。

5.1 通訳現場における AI を利用した機器に関する調査の結果

この項目では、具体的にパソコンなどの画面に発言者の発話やそれらの訳文が映し出されるかと尋ねており、複数回答が可能な質問である。その結果、「英語による話者の発話が表示される」と答えた回答者が 30 名中 17 名、「英語を日本語に訳したものが表示される」と答えた回答者が 30 名中 9 名、「日本語による話者の発話が表示される」と答えた回答者が 30 名中 7 名、「日本語を英語に訳したものが表示される」と答えた回答者が 30 名中 5 名であった（表 1 参照）。全回答者の中で、このすべてを経験している回答者は 30 名中 3 名であった。

その一方で、30 名中 11 名は「そのような経験がない」と回答した。これらの回答者の通訳歴は、5 名が 20 年以上、5 名が 10 年以上 15 年未満、1 名が 5 年未満であった。調査のカテゴリの 15 年以上 20 年未満と 5 年以上 10 年未満の通訳者には「そのような経験がない」という回答者は存在しなかった。

表1 画面に表示される内容

画面に表示されるもの	経験している人数
英語の書き起こし	17
英語の和訳	9
日本語の書き起こし	7
日本語の英訳	5

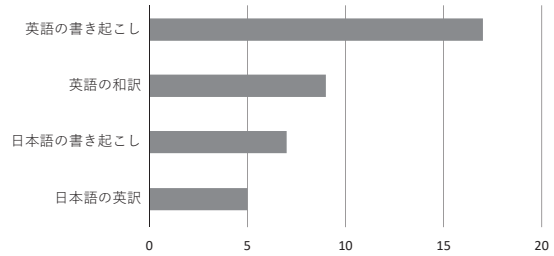


図1 画面に表示される内容

表2 AIを利用した機器の利用経験

経験の有無	回答者の人数
AIを利用した機器を経験している	19
AIを利用した機器を経験したことがない	11
全回答者	30

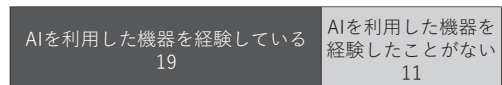


図2 AIを利用した機器の利用経験

5.2 利用の頻度に関して

この項目ではAIを利用した機器の通訳現場での利用の頻度に関して、「経験したことはあるという程度」「時々、経験している」「ほぼ常時、経験している」という選択肢から選択してもらった。12名は「経験したことはあるという程度」と回答しており、また7名は「時々、経験している」と回答している。「ほぼ常時、経験している」と答えた回答者はいなかった。

表3 AIを利用した機器の利用頻度

頻度	回答者の人数
経験したことがある程度	12
経験したことはない	11
時々、経験したことはある	7
回答者の合計	30

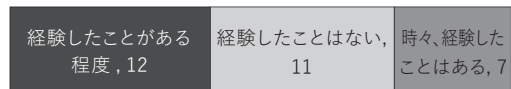


図3 AIを利用した機器の利用頻度

5.3 AIを利用した機器の利用に対して、どのように感じるか。

この項目では、複数回答ではあるものの14名が「便利なので、好ましく思う」と答え、6名が「役に立つので、好ましく思う」と回答している。その一方で、否定的な項目では、7名が「通訳の仕事を取られるので、好ましく思わない」と回答し、6名は「信用できないので、好ましく思わない」と回答し、2名は「何とも思わない」としている。尚、7名は「その他」のところで否定的なコメントを残している。

表4 利用に対する捉え方

どのように感じるか	回答者の数
便利なので好ましく思う	14
その他の否定的な意見	7
仕事を取られるので好ましく思わない	7
あまり信用できないので好ましく思わない	6
役に立つので好ましく思う	6
何とも思わない	2

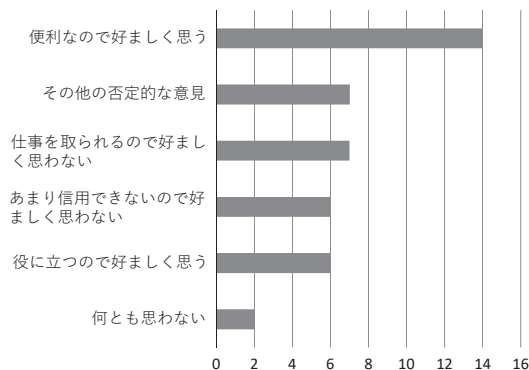


図4 利用に対する捉え方

「その他」の自由記述のコメントとして、6名の回答者から、画面を見ることによる集中力への影響に関係する以下のような報告があった。

「訳出する通訳プロセスの邪魔になる」（回答者3番）

「集中しにくくなる」（回答者5番）

「集中力が削がれるので好ましくないと思う」（回答者7番）

「『聞く』という行為に集中しきれないこともあり好ましくないと思う」（回答者10番）

「目と耳で同時に情報を取り入れると集中力が分散されてしまうリスクがある」（回答者26番）

「文字の中にそれを見付けるという作業に一瞬取られ、集中が切れるのではないか」（回答者28番）

さらに「その他」として「好ましく思う一方で、精度が低いので参考程度の使用だと思われる」（回答者12番）という記述や「好ましくはないが、受け入れるというスタンス」（回答者23番）や同様のコメントとして、「集中（力）が切れるのではないか、ただしこういった作業にもいずれは対応しなければならない時代になる」（回答者26番）というコメントがあった。

5.4 ヒトの通訳者と AI の将来の共存の可能性に関して

「将来、ヒトの通訳者と AI が共存すると思うか」という質問に関しては、26名が「そう思う」と回答している。残りの3名は「その他」の意見として、以下のような報告を行っている。

「英（語と）スペ（イン語）、日韓など類似性が高いペアでは（共存する）」（回答者7番）

「あくまでも補助的に使う程度なら共存可能だと思います。メインはひと（ヒト）だと思います」（回答者22番）。

「共存していけることを願う」（回答者29番）

1名は「わからない」（回答者15番）と回答している。

5.5 将来、ヒトの通訳者はAIにとって代わられるかということに関して

この質問に関しては、20名が「そう思わない」と回答している。その一方で、5名は「そう思う」と回答している。残りの2名は「分野による」と回答している。あとはそれぞれ1名ずつ、以下の報告があった。

「準備された講演や明確な話ではかなりの部分でAIが代わりになるが、深くコンテキスト依存型のフリーディスカッションなどでは引き続き人の介在が必要」(回答者6番)

「共存になると思う」(回答者13番)

「完全にはとって代わられないことを願う」(回答者29番)

5.6 そう思う理由(自由記述)

この質問項目では、回答者が「ヒトの通訳者がAIにとって代わられる」あるいは、「ヒトの通訳者がAIにとって代わられることはない」と思う理由について尋ねている。まず「ヒトの通訳がとって代わられることはない」という意見の理由から報告する。

このことに関しては、「ヒトでなければできないことがある」(回答者1番)として、具体的に以下のような報告が行われている。

「コンテキストやニュアンスといった言語化されないメタ情報や意味を把握しての通訳」(回答者3番)

「感情や臨機応変に対応する」(回答者8番)

「表情や声色から察する」(回答者10番)

「会話の文脈や微妙なセンテンス」(回答者15番)

「状況においては意識」(回答者16番)

「微妙なニュアンス」(回答者18番)

「共感による判断」(回答者30番)

また「日本人の日本語があまりにも意味不明で省きすぎで人間の通訳者が補ったり明確化して英語にしている」(回答者7番)という報告もあった。

「その他」の報告としては、「機密内容の会議では、マシーンよりヒトの通訳が好まれる」(回答者23番)という報告もあった。また分野によってはヒトの方が好まれる通訳の例として、「ショッピング同伴通訳、各種アテンド通訳(通訳ガイドなど路線に沿った通訳案件)、市役所などでの申請する時の通訳、視察通訳」(回答者4番)があげられている。

次に「ヒトの通訳がAIにとって代わられる」と思う理由を報告する。

「私の勤めている会社でも、翻訳はほぼAIに取って代わられており、通訳の仕事がAIに取って代わられるのも時間の問題だと思う」(回答者25番)

「簡単な内容であれば、AI通訳・翻訳で十分だから」(回答者31番)

5.7 通訳現場以外での AI を利用した機器の利用に関して（自由記述）

この質問項目に対しては、25 名から報告が得られた。その内訳としては、17 名により翻訳機の利用（主に DeepL や Google 翻訳）が報告された。この翻訳機の利用とは、通訳に際して提供される会議用の資料の翻訳に用いるとのことであった。「それらの資料が日本語でない場合には、この資料を日本語に訳して内容を理解して準備する」との報告である。具体的には「国際会議の前日の夜 23：00 に、数百ページの資料が送られてくれば、それを自動翻訳機にかけて、急いで内容を把握」（回答者 2 番）という報告があった。また「DeepL を用いて訳をつくり、これを自分なりの言い方に変換していくことで、時間が節約できている」（回答者 10 番）という報告もあった。また同様の報告として、「準備の時間がない時や、翻訳の際に DeepL を利用して大体的内容を理解する」（回答者 18 番）という報告もあった。

3 名の回答者からは、ChatGPT を利用して内容に関する調べものを行ったり、単語を調べたりするという報告があった。

6. 結果の考察

本章では、上記の結果に基づき、以下の項目に関して考察を行う。

6.1 通訳現場における AI を利用した機器の利用に関する実態

30 名の回答者のうち、経験したことがない回答者が 11 名であった。その 11 名の通訳歴は 5 年未満から 20 年以上と幅広い通訳歴となっている。このデータからは高橋（2023c）の調査の「経験豊かな通訳者の稼働する場面ではあまり AI を利用した機器は利用されていない可能性がある」という結論に結び付けることは難しい。調査時は秋の繁忙期を迎え、5 月の調査の時よりも通訳案件そのものが増加したことにより、利用が増えた可能性も考えられるが、このデータから、ビジネスの場の通訳場面において、AI を利用した機器が導入されているということは間違いなく言えるであろう。

ただ依然として、30 名中、11 名は経験したことがないと回答しており、「常時経験している」と回答した回答者はいなかったことから、まだ導入されていない場面も多く、それほど頻度も高いわけではないと考えられる。昨今、AI が話題になってきていることもあり、とりあえず導入してみるところが増えてきたと考えることもできるであろう。

表示されるテキストに関しては、書き起こしのみならず訳文まで表示されるケースが見られる。ただ回答者も指摘しているように訳出の精度がどの程度まで高いかという問題は残るであろう。

6.2 AI を利用した機器の利用に関する通訳者の捉え方

AI を利用した機器の利用を通訳者が肯定的に捉えているのか、否定的に捉えているのかということに関しては、10名は肯定的に捉えており、8名が否定的に捉えている。その一方で、別の10名は肯定的な意見を述べた後に否定的な意見も述べている。まだ導入されてから時間があまり経過していないこともあると思われるが、回答者の複雑な心境や戸惑いが観察できる。14名（4名のコメントは後半が否定的）は「便利なので、好ましく思う」と答えて肯定的に捉えている。「中立」のカテゴリーに分類したコメントではあるが「好ましくはないが、受け入れるというスタンス」（回答者12番）や「集中（力）が切れるのではないかと、ただしこういった作業にもいずれは対応しなければならない時代になる」（回答者26番）という捉え方も現実を前向きに捉えている例であろう。新たな状況に前向きに対処して行きたいという姿勢が観察できる。

また画面に書き起こしが表示されることもあることから、英語、日本語のいずれの場合にも聞こえなかった箇所や、聞き取れなかった箇所の確認が可能となる。ということは、音声情報の正しい認識に大きく依存する通訳の場合には、このようなツールの利用は役に立つと考えることができるであろう。またコメントにもあったように、数字の書き取りも画面を見ればわかるので、メモを取る必要がなくなるかもしれない。

しかしその反面、「その他」の自由記述で報告されたように、6名の回答者は「文字やテキストを見る」ことによる集中力への影響を報告している。先行研究（高橋 2023a）では「通訳者には『耳に頼るタイプ』と『目に頼るタイプ』がある」ことを報告したが、「耳に頼る」タイプの通訳者ではなくても、画面のテキストや文字を見ることで、音声に集中しづらくなる可能性は十分に理解できる。こういったことを総合的に判断すると、確かに回答者の心境は複雑であることも推察することができる。

またもしこのような状況が今後も継続するようであるならば、通訳者の育成過程や通訳訓練の際に、画面を見ながら訳出を行う練習や、聞きとりばかりに認知資源を集中させることなく、効率的に配分できるようにする訓練も必要となるであろう。

6.3 通訳現場以外における通訳者の AI を利用した機器の利用

本調査の結果では、通訳者が事前の会議の準備段階や現場で用いられる原稿を予め DeepL や Google 翻訳などの自動翻訳機を利用して、大体の内容を把握したりするということが判明した。これは回答者から報告されているように、特に案件が立て込んでいて時間の余裕のない時や、通訳を開始する直前に資料が出た際などには、便利な使い方であろう。

3名の回答者からは、ChatGPT を利用するという報告があったが、全回答者の10%であることを考えると、比較的少ないように思われる。これほど話題になっているにもかかわらず、あまり利用が進んでいないようであることには、何か特殊な背景があるのかもしれない。

6.4 AI とヒトの通訳者に関する展望

本調査の結果からは、26 名が「将来、ヒトの通訳者と AI が共存すると思う」と回答しているが、20 名は「ヒトの通訳者が AI にとって代わられることはない」と予測している。「AI にとって代わられる」と思っている回答者は 5 名であることから、「とって代わられることはないであろうが、共存することにはなるであろう」と考えられていると、本調査の結果からは、結論づけることができるであろう。これは 9 人の通訳者を対象とした予備調査の結果と同じである（高橋 2023c）。

その理由として「ヒトでなければならないこと」の例が報告されているが、これはすでに予備調査のアンケートで報告された内容と同じである。これらの報告をもとに考察すると、現段階では確かにヒトの通訳者でなければならないことがあり、そのために部分的には共存することはあっても、AI にとって代わられることはない結論づけることが可能であろう。

7. 結論

本稿では、ビジネスの分野で稼動する通訳者の通訳現場における AI を利用した機器の利用状況と、通訳者自らの AI を利用した機器の利用状況に関して、調査を実施し、その結果を報告した。またさらに AI を利用した機器の利用に関して、通訳者がどのようにこの状況を捉えているのかということ調査し報告を行った。本調査は経年で実施している通訳現場の実態調査に参加した 9 名の通訳者を対象としたアンケートと、別の 1 名のビジネス通訳者のインタビューのデータを事前調査として、それに基づいて行ったものである。本調査では、実際にどのように AI を利用した機器が利用されているのかを頻度とともに具体的に尋ねた。その結果、全回答者 30 名中、11 名はまだ利用した経験がないとのことであった。利用したことのある回答者にも「常時利用している」という回答者は存在しなかった。現段階では、次第に利用され始めているという結果に留めるべきであろう。

具体的な状況としては、英語や日本語の発話が画面に表示されるだけでなく、その精度はともかく、訳文も表示されるようになってきていることが判明した。このような状況を肯定的に捉える回答者もいる一方で、音声の聞き取りに集中しながら画面を確認する作業に対することへの余分な負荷を指摘する回答者もあった。まだ導入からあまり時間が経過していないこともあり、通訳者自身の捉え方も肯定的とも否定的とも受け取れるような、複雑な心境であることが判明した。そのような中でもこの変化を前向きに捉える姿勢もうかがうことができた。

通訳者自身は準備のために DeepL や Google 翻訳などの機械翻訳を使って資料の読み込みなどの準備をしており、この点は肯定的に報告されていた。

本調査の回答者は、「ヒトにはヒトによってのみ可能な通訳の部分があるので、ヒトの通訳が AI にとって代わられることはないであろうが、将来的には共存してゆくのではないか」という

のが現段階での通訳者の展望であると結論づけることができる。

8. 本調査の限界と今後の課題

本調査では、個人情報に触れるような質問を極力避けるため、稼動している業種を尋ねていない。従ってどのような業種で、どのようにAIを利用した通訳が導入されているのかということは、解明することができなかった。機械とヒトとの使い分けを考える上では、今後は必要な事項となるであろう。

また回答者の稼働形態に関して、フリーランス通訳者の回答者と社内通訳者の回答者の間に5倍の人数の差があり、両群としての比較をすることができなかった。今後は同じくらいの数で比較を試みる必要があると考える。そのことでフリーランス通訳者と社内通訳者の違いが、より鮮明になる可能性を期待したい。両群の差のみならず、通訳者の捉え方などでも尺度を用い、検定にかけ統計処理を施すことにより、より科学的な根拠を提示することも重要であろう。

本調査の結果は、2023年11月現在の状況であるので、今後も継続して調査を行い、その推移を観察する必要もあると思われる。今は導入の直後で、社会で話題になっていることもあり、導入の加速が進んでいると考えられる。しかし、「信用できない」訳出や「ヒトでなくてはできない」訳出の問題が回答者からは指摘されている。訳出の精度が高まり、訳出がより信用できるようになっていった場合、さらにAIがヒトの特性を学習してその能力を獲得した場合には、現状がさらに加速するであろう。しかしその反対に、精度はもとより、クライアントがやはり訳出には「ヒトでなければできない」訳出があると感じるようになった際には、ヒトの通訳が見直されることになるのではないかと。従って、その時には通訳者は「ヒトでなくてはできない」訳出ができる通訳者でなくてはならない。

本調査の結果は通訳者のみの意見に基づくものである。これに対して通訳者を雇うクライアント側はどのように感じ、どう考えているかは明確ではない。今までの調査でも、通訳者とクライアントの考え方に齟齬が見られたことがあったので、クライアント側からも聞き取り調査を行う必要がある。

いずれの場合においても、今後の推移に着目し続けることは意義のあることであろう。

謝辞

今回、アンケートにご協力いただいた通訳者の方々には、秋の繁忙期にお願いしたことをお詫び申し上げますとともに、大変お忙しい中、迅速にご回答いただいたことに、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 高橋絹子（2022）「コロナ禍における新たな通訳スタイルと通訳の将来の展望に関して」『関西大学外国語学部紀要』第 26 号 69-88
- 高橋絹子（2023a）「オンライン通訳と視覚情報——通訳とは何か？」『関西大学国語学部紀要』第 28 号 2023 年 109-123
- 高橋絹子（2023b）「コロナ禍の新たな通訳スタイルで活躍する通訳者たちのその後」『関西大学外国語学部紀要』第 29 号 35-48
- 高橋絹子（2023c）「最近の通訳現場に関する報告——オンラインと AI 通訳オンライン通訳と AI」日本通訳翻訳学会第 23 回年次大会 関西大学千里山キャンパス
- 高橋絹子・木村護郎クリストフ（2023）「通訳者の付加価値——現場の通訳者の報告から」上智大学言語学会第 37 回年次大会 オンライン開催
- 松下佳世（2020）「コロナ禍における遠隔通訳の実施状況調査」『通訳翻訳研究』第 20 号 125-146
- 朝日新聞デジタル「学校でチャット GPT、指針策定へ 考え深める道具に 文科省」2023 年 4 月 7 日

